薬学を楽しむきっかけマガジン
YAKUZEMI+ PLUS
No. 25
2014 SPRING
TAKE FREE

＜環境＞×＜薬＞が生む、新しい可能性

「古着 de ワクチン」から考える、薬剤師の未来

薬学ゼミナールがラオスドナーツアーで出会った、「古着 de ワクチン」という画期的なサービスの存在。「環境衛生」と「ワクチン」を使った新しいビジネスモデルには、「人の役に立つ」ことの根源的な意味を捉え直す、大きなヒントが隠されていました。

Text / Takuo Shibasaki
Photographer / Daiske

古着 de ワクチン」とは？

「古着 de ワクチン」を購入することで、5人分のポリオワクチンをミャンマー、ラオスなどの開発途上国の子どもたちに寄付することができ、さらに古着を送ると、アフリカ、中東、東南アジア等で再利用されるという企画です。

専用のショッピングサイトから「古着deワクチン」を購入すると、もれなく専用着払い伝票、または段ボール付着払い伝票が到着します。

不要になった衣類、バッグ、靴、服飾雑貨を段ボールに詰めて、指定宅配業者の集荷へ！たったこれだけの作業で、部屋の片隅で眠っていた不要アイテムの整理が可能に。

送った衣類やバッグ、靴、服飾雑貨は、決して無駄にはなりません。主に開発途上国に送られ、ワクチンをはじめ様々な形に再利用されます。

「古着deワクチン」を注文するだけで、認定NPO法人「世界の子どもにワクチンを 日本委員会(JCV)」を通じて開発途上国の子どもたちにポリオワクチンが。一口につき5人の命を救うことができます。

集められたアイテムは寄付されるのではなく、安価で輸出販売されます。そうすることで現地でビジネスが生まれ、新しい雇用が生まれます。また、その収益の一部でポリオワクチンを更に提供することも。

「古着deワクチン」のサービスを利用すると、特典として専用ショッピングサイトで使える1000円分のクーポン券が。さらに口コミを書き込むだけで、1件ごとにワクチンを寄付することが可能に。

38万人分のワクチンを生む、画期的なビジネスとは？

受講生1人につきワクチン5人分を開発途上国に贈り、子どもたちを守る」というルールを作り、未来を担う命を救うためのCSR（企業の社会的責任）活動を行っている薬学ゼミナール。各教室では募金箱の設置なども積極的に実施し、集められた支援金を認定NPO法人・世界の子どもにワクチンを 日本委員会（以下、JCV）に届けるなど、学生たちと一緒に「今できること」を実践しています。

その届け先であるJCVでは、主に予防可能な感染症で命を落とす子どもたちがいる国々にワクチンや予防接種関連の物資を贈る活動を実施。また一方で、支援につながる商品・サービスを様々な企業や団体と提携しながら展開しています。

2012年5月、渋谷教室の講師が参加したラオスドナーツアーで、活動を共にした島根千恵さんが属する企業・日本リユースシステムもそのひとつ。この企業では、ショッピングサイトから購入した専用着払い伝票を使い、家庭で不要になった衣類やバッグ等を送り、アフリカ、中東、東南アジア等に輸出。その収益と売り上げの一部をJCV経由でポリオワクチンに換え、開発途上国に寄付するという画期的なサービス「古着deワクチン」を行っています。

2010年 11 月から始まったこのサービスでは、なんと今年3月までに合計 38 万人分以上ものワクチンを寄付するという実績も。「環境衛生」と「ワクチン」を関連付けた「人の役に立つ新しい仕事」――。そこには、今後の薬剤師のあり方を創造するための、大きなヒントが込められていました。

［写真右］ラオス視察に参加した渋谷教室の笹講師（後列左から２人目）と藤田講師（後列中央）。前列左には島根さんの姿も。［写真左］昨年、JCV と薬学ゼミナールの共催で行われたツアーの写真展では、「古着 de ワクチン」の特別ブースも設置された。

心の満足感を重要視して、継続可能なシステムを創る

総合リユース・リサイクル業を主な事業とする日本リユースシステムですが、なぜ「古着を使用したワクチンの寄付」という企画が生まれたのでしょうか。そこには日本特有のゴミ事情が隠されています。

「国内で『ゴミ』と言われているもので、一番多いのが生ゴミ。その次点に挙がるのが、実は衣類ゴミなのです。しかも、捨てられている衣類の 90%はまだ使用可能です。一方、国外を見てみれば、開発途上国などの国々では古着のニーズが非常に高いという現状が。このような国々にしてみれば、日本の衣類ゴミは『古着として、清潔でクオリティが高い』という逆説的な価値を含んでいます。そこで、価値の差を埋める事業を行えないかと考えたのが企画の出発点でした」（島根さん）

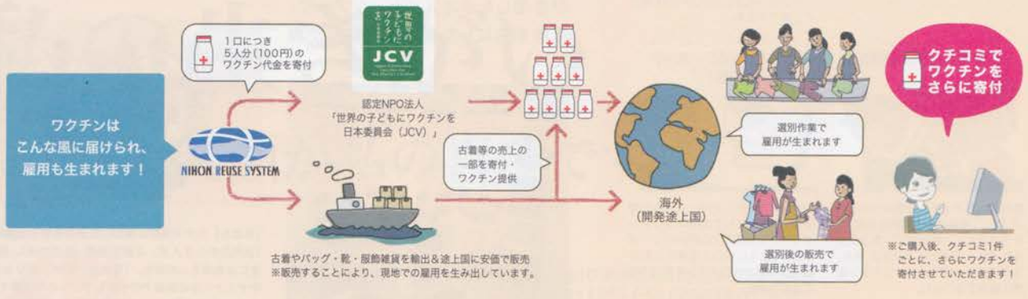
「私たちはリユース・リサイクル業者ではなく、『捨てさせない屋』なんです」と島根さん。目の前の人々に寄り添い、個々が抱えている問題点を解決するためには、仕事の枠に捕らわれない姿勢が必要だと語ります。

「古着deワクチン」は、共同提供を行うリクルートライフスタイルの「赤すぐnet」(akasugu.fcart.jp/)で購入することが可能。

facebookのファンページ(www.facebook.com/furugidevaccine?fref=ts)では、特別寄付イベントなども開催。

一度は不要な衣類をボランティアで現地に届けることも考えたという日本リユースシステム。しかし、「与える／与えられるだけでは、関係にどうしても馴れ合いが生じ、継続的な活動にならない」と判断。それぞれの人々の満足感を生み出し、価値の差を埋めるためにも、資本を生み出すシステムが必要という考えに至り、本格的に企画開発を行うことになったのだと言います。

「私たちが着目したのは、『なぜ、国内では衣類が捨てられるのか』という問題です。そこには『できれば捨てたくないが、衣類を売ったり寄付するのは面倒』という国内ユーザーの声があるのに気付きました。一方、海外に日本の不要な衣類を届けるとなると、莫大な物流コストがかかってしまうという問題も。そこで、2つの問題の解決策として、ユーザーが潜在的に抱えている『捨ててしまうことの罪悪感』を買い取る（サービス提供）ことでワクチン代や物流コストを賄う方法を考えたのです」（代表取締役・山田正人さん）

「どうすれば心の満足感を生み出せるのか」という視点で新しい流通を作り、衣類の再利用やワクチン寄付だけでなく、現地での雇用も生みだすことにも成功（※詳細は下記を参照）した「古着ｄｅワクチン」。このような「サービスを必要としている人の気持ちを最重視する」という姿勢は、患者中心の医療が叫ばれる薬学界にとっても、新しい道を生み出す大きな可能性を秘めていると言えるのではないでしょうか。

～「古着deワクチン」が生む、ワクチン寄付と雇用発生の流れ～